

道德教育地域教材

統 十 勝 野



はじめに

未曾有の大災害の発生や新型コロナウイルス感染症の拡大など、将来の変化を予測することが困難な時代を迎え、学校教育においては、児童生徒に「人としての生き方」や「社会の在り方」についてよりよい方向を目指す資質・能力を備えることが求められており、道徳教育は今まで以上に大きな役割を果たすことが期待されています。

こうしたことから、十勝教育局としましては、十勝管内教育推進の重点に、『考え、議論する道徳』の授業改善に向けた道徳教育の充実」を掲げ、平成三十年度に十勝に視点を当てた地域教材「十勝野（とかちの）」を作成しました。活用していただいた学校からは「身近な人物を題材とした教材であるため、子どもが道徳的価値について自分ごととして考えやすい」、「地域への興味・関心を高めるために有効である。更に教材の充実を図ってほしい。」などの声が聞かれました。

こうした学校からの要望等を踏まえ、今回、各学年段階において多様な内容項目を指導できるよう、「続 十勝野（ぞくとかちの）」を作成しました。

本地域教材は、学習指導要領の趣旨を踏まえ、郷土の先人や偉人の逸話を基に、自然、伝統と文化、開拓などを題材に取り上げ、児童生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような教材を目指し、小学校低学年向け、中学年向け、高学年向け、中学校向けの計四編を作成するとともに、教材の巻末に中心的な発問の例を記載しました。各学校においては、中心的な発問例を参考に、それぞれの学校・家庭・地域の実態に応じて本書を積極的に御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の作成に当たって、御尽力いただきました関係各位に、心から御礼申し上げます。

令和三年三月

十勝教育局長 村上 由佳

もくじ

〈小学校低学年用〉

- 一 なかよくして、たすけあう【友情、信頼 B (9)】 モチヤロクと … 3

じゅうたろう

〈小学校中学年用〉

- 二 自然を大切に作る心をもって【自然愛護 D (19)】 林 豊洲 … 5

〈小学校高学年用〉

- 三 人間として生きる喜びを感じて【よりよく生きる喜び D (22)】 関 寛齋 … 8

〈中学校用〉

- 四 生きることとは【よりよく生きる喜び D (22)】 神田日勝 … 11

モチヤロク と じゅうたろう



【モチヤロクの写真】

わたしたちが すむこの土地には、むかしからたくさん アイヌの人たちが、サケや シカをとり、しよくぶつをつかって 生活していました。

今から 百五十年い上前、本しゅうから 人が たくさんきて、この土地を 「北海道」と よぶことにしました。そして、森や林の 木を切り、町や 道ろ、はたけを つくりました。これを、「かいたく」と言います。

アイヌの 人たちは、もともと すんでいた土地を 「わ人」(本しゅうから きた人)にとりあげられ、長い間 つづけてきた、耳かざりや、サケを とることを 「やっては いけない」、「かえなさい」、「わ人と、同じように しなさい」と、めいれい されました。

明じ十五年(一八八二年)、すずき じゅうたろうという わ人の わかものが、よこはまから、帯広に やつてきました。じゅうたろうは、一人ぼっちで はたけを つくり、「かいたく」をしました。そして、さむい さむい 十勝の 冬を、生まれて はじめて すごしました。

そんな じゅうたろうの生活と、さびしい心を たすけたのは、アイヌの リーダーの モチヤロクと なかまたちでした。モチヤロクは、じゅうたろうの ことを、いつも 心ばいして サケや シカ肉などの、食べものを あげました。じゅうたろうも おれいに ごはんを ごちそうしたり、おさけを いっしょに のんだりして、なかよくしました。じゅうたろうに 高いねつが 出たときも、たすけてくれたのは、アイヌの 人たちでした。

春になり、本しゅうから じゅうたろうの なかまがきて、「かいたく」が はじまりました。

ある日 はたけを 作るため、なかまの わ人が、草に 火を つけました。火は、あつというま

に 広がって、アイヌの 人たちの そうこが、やけてしまいました。

「わ人は、かつてに わたしたちの 土地にきて、こんどは 家までも、やいてしまった！」

アイヌの 人たちは、おこったり、こわがったりして、みんな どこかへ 行ってしまいました。モチヤロクの 一家だけが のこっていました。じゅうたろうは、なかまと いっしよに たくさんのお米と おさけを もって モチヤロクの ところへ あやまりに 行きました。

しばらくして、わ人に「サケをとってはいけない」と きめられた アイヌの 人たちは、食べるものが たりなくなつて、こまつて しまいました。じゅうたろうは、アイヌの 人たちをたすけるために、野さいのたねを あげて はたけの つくりかたを 教えました。

じゅうたろうは、コカトアンという アイヌの女せいと けっこんしてからも ときどき モチヤロクに あいにいって、いっしよに おさけを

のみ、「かいたく」の 大へんさについて なきながら、語りました。アイヌの 人たちも いっしよに、なみだを ながしました。

「パラパラ・ニシパ（なきべそだんな）」
いつのまにか じゅうたろうは、アイヌ語のあだ名で みんなから、よばれるようになりました。

「この土地に もともと すんでいた アイヌの人たちと、たすけあつて 生きていく。」

そう 心にきめ、 じゅうたろうは いつまでも いつまでも モチヤロクや アイヌの 人たちと なかよくくらししました。



【すずき じゅうたろうの写眞】

◎ アイヌの 人たちの そうこが もえた あと、なぜ、モチヤロクの 一家だけが のこつて いたのでしょうか。
◆ 「ともだちつて いいな」と おもつた ことは ありますか。それは どんな ときですか。

林 豊洲

「日高の山々に囲まれた狩勝峠から十勝平野を見たまえ。この森林と平野、森と湖、山と川を豊かにたたえる帯広こそ、北方文化創造の基地となる重要な地だ。」



【林 豊洲の写真】

帯広に本社を置く新聞社の創業社長であり十勝の自然を*こよなく愛した、林豊洲。彼は、十勝に生きる人々のために力をつくし、四十六年の短い生涯をかけぬけました。

豊洲は、明治二十二年（一八八九年）、大分県臼杵市に生まれました。本名を板井茂といます。

一九〇八年、十九歳になった茂は、地元の名家、林家と*養子縁組し、長女・波津女と結婚したことで、名を林茂と名乗るようになりました。

波津女の父・長次郎が、帯広に単身赴任し、家具店を開いていたこともあり、茂は妻の波津女とともに帯

広へ移住し、家具屋として働くようになりました。

茂は、しばらくの間、家具屋として商売を続けていきましたが、「商品販売の仕事は、性に合わない。まだ開拓半ばである十勝の開発に身を投じることこそ、自分の使命ではないか。」と考えるようになります。

一九一四年、茂は、「十勝日日新聞」社長、菅野光民と出会います。光民は、十勝開発に対する独自の考えを掲載し、多くの読者の賛同を集めていました。

もともと「話すこと」や「書くこと」が好きだった茂は、光民の考えや新聞の魅力にすっかりとりこまれ、「自分が打ち込める仕事はこれしかない」と長次郎を説得し、家具屋をやめて、二十六歳で「十勝日日新聞」に入社を果たしました。

ある日、光民は茂にこんな話をしました。

「十勝開発の最後の決め手はトムラウシだ！十勝の発展のためには、どうしても開発が必要なんだ！近く、現地調査に行こうと思う。また留守にするが、会社をたのむぞ。」

「トムラウシか…。おれは、何も反対するわけじゃない。ただ、それよりも先に手をつけなければならな

い土地が、山のようにあると思うんだ……。」

茂は、光民の開発を進めようとする思いを理解していましたが、十勝の発展は、観光にあると固く信じるようになっていました。景色のよい土地を探し、それを宣伝して観光客を招くことで、十勝の美しい自然を守り豊かにする、というのが茂の考えでした。

このころの日本は、住民生活の向上のため、土地の開拓を進めることが中心となり、茂のように、「観光業」に目を向ける人はほとんどいませんでした。

一九一八年、茂のもとに、* 計報が届きます。調査に行った光民が、熊におそれ命を落としたというのです。それを聞いた茂は、涙を流しながら

「おれが、お前の志を継いでやる！十勝開発のために命を落としたお前のため！」

と、光民の代わりに十勝の発展を進めることを誓うのでした。

こうして、茂は、光民の代わりに三十歳の若さで「十勝日日新聞」の経営に携わるようになり、「十勝毎日新聞社」と会社の名前を変え、社長に就任しました。また、このころから、茂は自分の名を「豊洲」と名乗るようになります。

社長就任からしばらく経ったある日、豊洲は、会社の仲間とともに、然別湖へカモ猟に出かけました。「ああ、あそこにカモが。」と、仲間が湖の岸を指さしましたが、豊洲は、猟銃を手にとろうとはしませんでした。

豊洲の目に映っていたのは、カモではなく、蒼く透き通って光る水面と、白樺の幹の白さを交えた、えぞ松やとど松の山なみの美しさでした。紺碧の水を蓄えた然別湖から、広大な十勝大平原がゆるやかにうねり、果てしなく広がる大地と、宝石のように輝く湖。

「十勝広しと言えども、これほどの秘境は他にはない！ 広く世の人たちに知らせよう！」

然別湖周辺の美しさにすっかり魅了された豊洲は、この場所を北海道の大観光地にすべく、国から国立公園の指定を受けるための運動を始めたのです。

当時、国から国立公園の指定を受けることは、日本を代表する自然の風景地であることを認められると同時に、指定された地域を保護し、観光名所として多くの観光客を呼び込むことが期待できるものでした。まず、豊洲は、十勝毎日新聞の紙面に、然別湖の素晴

らしさを書きつづりました。「秘境・然別湖を、絶対に国立公園に指定させる！」という思いから、国立公園審査委員の田村剛博士を現地に呼び、然別湖の美しさを、自分の目で確かめてもらいました。

豊洲とともに然別湖の岸边に立った田村博士は、「うーむ、なるほど…、これは聞きしに勝る眺め！まさに天下一の眺めです！」

田村博士の言葉を聞いた豊洲は、「その通りです。あの折り重なって積まれた岩の間に生えているのが、ガンコウラン・オンコ・シヤクナゲの高山植物ですよ。」

と、まるで自分の庭を自まんするように話しました。また、大阪と東京の新聞社が全国的に*日本新八景の募集を行うと、他の新聞社にもかかわらず、十勝を売り出す絶好の機会として、狩勝峠から見る十勝平野の景色を投票するよう、新聞で市民に呼びかけたのです。

豊洲は、「十勝の開発」と「美しい自然」を共存させるといふ険しい道を選び、長い間、活動を続けました。それからしばらくして、豊洲の美しいものへの愛情と、それを守ろうとする努力が身を結び、狩勝峠は「日

本新八景」に選ばれ、一九三四年には、然別湖と糠平、トムラウシを含めた二十三万ヘクタールの土地が、大雪山国立公園に指定されたのです。

「ああ、なんて美しい景色なんだ。」

国立公園指定から八十年以上が経った今も、然別湖と十勝平野の美しい眺めは、大雪山国立公園を訪れた観光客に、おもしろくなく感嘆の声を上げさせるのでした。



【然別湖 顕彰碑の写真】

- *こよなく…この上なく
- *養子縁組…血のつながりとは無関係に親子関係を成立させること
- *訃報…人が亡くなったことをいち早く連絡すること
- *日本新八景…日本を代表する八つの景勝地

◎ なぜ、豊洲は観光業に力を入れたと考えたのでしょうか。
◆ あなたの身の回り、自然を守る活動を見たことがありますか。

関 寛 齋

「世のため人のために汗を流してこそ、人間としての生き方である。」

これは、この物語の主人公、関寛齋の生涯を支えた言葉です。寛齋は、北海道で最も寒さの厳しい陸別町に、全ての人が平等に暮らせる*理想郷の建設を目指し、開拓に身を捧げました。



【関 寛齋の写真】

寛齋は、一八三〇年、現在の千葉県東金市に生まれました。寛齋が生まれた地域は、百姓として生活する者が多く、人々の暮らしは決して豊かとは言えません。幼くして母親をなくし、百姓であり*儒学者でもあった関俊輔に養子として引き渡された寛齋は、俊輔が開く私塾「製錦堂」に通いながら勉学に励み、勤勉、儉約、質素など、あらゆる苦難に耐えられるように育てられました。

十九歳になった寛齋は、千葉県佐倉市にある*蘭医学塾の佐倉順天堂に入門し、佐藤泰然から医学を学びました。ここで寛齋は、医学とともに「医をもつて人を救い、世を救う」

という教えを学びます。

一八五二年、順天堂で医学の学びを終えた寛齋は、東金市へ帰郷し、「養成所」という仮の医院を開業しました。その年の十二月、寛齋は俊輔の老家である君塚家の次女、君塚アイと結婚します。寛齋二十三歳、アイ十八歳のことでした。それから約四十年の間に、寛齋は徳島県に移住し、アイとの間に八男四女をもうけ、医者としては「医をもつて人を救い、世を救う」という教えのもと、多くの命を救いました。

一八九一年、六十一歳になった寛齋は、医者としての自己限界を感じていました。このころの日本は、江戸幕府から明治政府へと政権が移り、士農工商の身分制度が撤廃されて約二十年が立ちましたが、依然として貧富の差が残っており、貧しい者は十分な医療を受けられず、次々に命を落としていたのです。そのため、寛齋は貧しい者からは一切お金を受け取らず、医療を施していました。

「このような貧富の差があってはならない。医者として患者を診ながら、貧しい者たちに腹一杯食べさせてあげられるような、みんなが平等に生きられる理想郷を作りたい。」

いつしか、寛齋はそのような思いをもつようになっていきました。そんな時、*依田勉三率いる晩成社の移民団が、北海道十勝の開拓に乗り出し、集団移住したという情報が寛

齋に届きます。寛齋は、胸の中で何かが弾けたような気がしました。

「北海道か。真つさらな未開の地こそ、理想郷を作るのにふさわしい。」

そう考えた寛齋は、一九〇二年、アイや、多くの*入植者と共に、開拓が始まったばかりの北海道陸別へと向かうのでした。寛齋が七十二歳のことでした。

陸別での開拓は、苦勞の連続でした。夏は三十度を超える猛暑、冬は氷点下三十度を下回る寒さが、寛齋たちを苦しめました。荒れ果てた地を開墾し、やつとの思いで育てた作物には、大量のバッタなど害虫が押し寄せ、それらを食い荒らしていききました。高齢の寛齋にとって、何度も続く開墾作業は非常に辛く厳しいものでした。それでも、寛齋は、作物が育つてくると、自分の子供が育つように可愛く、愛おしくなることに喜びを感じていました。自然との関わりの中で、苦勞と喜びが絶えず入り交じり、あつという間に一年が過ぎていく。そんな生き方を「人間らしい」とさえ感じるようになっていました。

こうした努力が実り、開拓は二十ヘクタールの開墾地、牛十頭、馬九十五頭を飼育する農場を築くまで広がりました。

一九〇四年、寛齋のもとに、電報が届きます。陸別から離れ、体の静養のため札幌に住んでいたアイが、亡くなったと

いうのです。それを聞いた寛齋は、目の前が真つ白になり、その場に崩れ落ちました。

「なんで、お前は：：わしを残して一人で：：」

妻アイの死は、寛齋を打ちのめしました。

「わしが無償で貧しい者へ医療活動をしていたときも、貧乏のどん底にありながら愚痴一つこぼさず、ついてきてくれた。わしは、アイの支えがあつたからこそ、頑張ることができたのだ。徳島から北海道へ来て、慣れない土地と重なる心勞が、アイの体を弱らせたのだ。アイ、すまない：：。」
寛齋は、どんなに体が痛くて辛いときも開墾作業を止めませんでした。アイが亡くなってからは、仕事をやる気力が全く湧きませんでした。何も手が付かなくなり、自分の食べる朝昼晩の食事さえどうでもよくなって、生きていることすら、うつとうしくなっていたのです。

そんな寛齋の様子を心配した三男の餘作が、寛齋の心の気休めになるだろうと考え、寛齋が尊敬する二宮尊親に会わせる手はずを整えていました。

二宮尊親は、一八九七年、福島県から開拓団を率いて十勝の豊頃に入植し、*報徳の精神のもと、大農場を築き上げた、いわば開拓の大先輩でした。

一九〇五年七月、寛齋は、豊頃の地に一面に広がる美しい

黄金色の畑を目の当たりにしました。そこには、麦やトウキビが豊かに実っていたのです。

「ここが、二宮農場だ！二宮一行が拓いた二宮農場だ！」

寛齋は、ここに辿り着くまでの険しい道のりの疲れが、一気に吹き飛んだ気がしました。

農場には、農夫たちが住む何軒かの家が建ち並び、その奥まったところの小さな家に、尊親はいました。

「あなたが、関先生ですか。お初にお目にかかります。よく訪ねてくださいました。」

寛齋は、尊親から農場を開拓するまでの話を聞きました。「ここに入植した方々が山野を切り開き、熱心に開墾した成果がやつと現れました。自作農を育てる。これが私の昔からの夢でしてね。ここにいる者たちは、みな、自分の畑もてることを誇りに思い、がんばっています。そして、お互いに助け合う心を大切にしていきますので、冷害で作物ができないときも、お互いに支え合い、逃げ出す人はいません。これは、私の誇りです。」

寛齋は、尊親の言葉から、アイを亡くして消沈していた心に、再び湧き上がる何かを感じました。目の当たりにした農場の姿は、寛齋が目指していた理想郷の姿と同じだったのです。

「ずっと考えていたわしの理想は、間違っていないかった！」

これから、みなと共に、陸別に理想の地を築いてみせるぞ！アイ、見ていてくれ。」

寛齋は、黄金色に輝く畑を眺めながら、目を細めました。

その後、陸別に戻った寛齋は、三男の餘作、四男の又一らとともに、約五百五十三ヘクタールの開墾地、牛九十六頭、馬百八十頭を飼育する大規模な農・牧場を築きあげました。

「人とはな、他の人たちから必要とされていると実感したとき、生き甲斐が生まれるのだ。」

これは、八十三歳になった寛齋が亡くなる三日前、家族に残した言葉だと言われています。



【関 寛齋が拓いた農場の写真】

- *理想郷：理想的世界
- *儒学：古代中国の思想をもとにした学問
- *蘭医学：オランダ医学
- *依田勉三：帯広市の開拓に携わった中心人物
- *入植：開拓地などに入って生活すること
- *報徳の精神：私利私欲に走るのではなく、社会に貢献すればいずれ自分に還ってくるという考え方

◎ なぜ、寛齋は医者としての自分に限界を感じていたのでしょうか。あなたにとって、「よりよい生き方」とはどのようなものですか。

神田 日勝



【神田 日勝の写真】

神田日勝は、一九三七（昭和十二）年十二月八日に東京都練馬で生まれた。日中戦争のさなかであったことから、「日本勝利」という希望を託して日勝と名付けられた。家族は父母と二人の姉、兄、そして妹の七人である。

父は衣料品を販売していたが、戦況の悪化と共に経営は苦しくなり、やがてその日の食べ物にも困るようになった。一九四五（昭和二十）年八月、一家は戦火を逃れるために戦災者集団帰農計画に基づく*拓北農兵隊に加わった。長旅を経てようやく鹿追に着いたのは、奇しくも終戦の前日、八月十四日であった。

敗戦の影響から、畑の貸付や農機具の給付などの約束は守られず、かろうじて支給された鋏一丁と鋸一枚で手つかずの原野を開墾することになったのである。

神田一家には五ヘクタールの開拓用地が与えられた。農業経験のない都会生活者が未開地をゼロから開拓するのは容易ではなかった。父は開墾だけではなく、現金収入のために郵便配達や他の農家の手伝いをして一家を支えていた。

苦しい生活の中でも、日勝は明るくおおらかに育った。開墾の仕事を手伝い、好きな絵を描いた。兄と一緒に仕掛けを作って野ウサギを捕獲し、冬にはスキー板を作って遊んだ。鹿追中学校に進学した日勝は美術部を創部した。兄も帯広の高校で美術部に入り、のちに芸術大学へ進学している。日勝は中学校を卒業後、進学せずに農家を継いだ。日勝は友人に、「自分は農業が好きで、それを継ぐのはむしろ当然のことだと考えていた」と話している。

やがて兄を通じて油彩画の魅力を知った日勝は、次第に創作への意欲を燃やすようになった。

その第一作ともいえるのが、十八歳の年に帯広平原社展で奨励賞となった『瘦馬』である。ベニヤ板に描かれたこの作品は、地方都市の展覧会とはいえ、自分の力量を問うという意味でまさに彼のデビュー作であった。翌年の平原社展には『馬』が出品され、平原社賞（最高賞）を受けた。

神田一家が初めて手に入れた農耕馬は、家畜商にだまされて買った老馬であった。この馬が『瘦馬』のモデルではな

いかと言われている。日勝の描く馬は農耕馬であり、仕事の仲間でもある。骨格のがっしりとした初期の『馬』は、体毛を*ペインティングナイフで一本ずつ緻密に表現し、*胴引きのために一部がすり切れている、まさに働く馬の勲章と呼ぶべき部分まで描写したのである。

日勝が農家を継いだ頃、世の中は高度経済成長期に入り、街中や農耕から馬の姿が急激に減少していた。しかし、積雪の多い北海道では冬期間の運搬に馬が不可欠であり、様々な作業に適していること、*厩肥の生産等のメリットから、馬利用を継続する人も少なからずいた。日勝もその一人で、近隣の農家がトラクターを入手する中、馬を使って田畑を耕した。日勝にとつて馬は、日々共に暮らす家族であり、生きるために手放せない存在でもあった。

一九六二（昭和三十七）年、二十四歳の日勝は、農村青年団の集まりで知った高野ミサ子と結婚した。二人は互いによき理解者であり、ともに畑に出て、牛や馬の世話もした。

生活は決して楽ではなかった。日勝は、通常なら油彩画にはキャンバスを使うところを、ベニヤ板に描いた。これはペインティングナイフを押しつけた際のダイレクトな手応えを好んだためと言われるが、制作費を安く上げるという理由もあった。

一九五七年の冷害、六三年の台風による大被害、六六年の冷害、そしてこの頃から急速に進んだ農業合理化のために、離農する小規模農家が後を絶たなかった。

厳しい生活の中で創作活動を続けた日勝は、テレビや新聞の取材、全道展や独立展の成績などから少しずつ名前を知られるようになり、作品制作を依頼する人も増えてきた。しかし、絵をもって生計の足しにするには至らなかった。

日勝は、「絵を描きたいという気持ち」について問われた時に、しばらく考えて「排泄行為と同じである」と答えている。自然に湧き上がり、我慢ができなくなれば溢れてしまうものであり、生きることと同義のものと考えていた。

日勝は、「農民画家」と呼ばれることを嫌っていた。世間が日勝が開拓者であることや独学であることを強調しすぎることについて、「僕のことを僕自身よりも詳しく知っている人がいて、僕に解説してくれる」と一人歩きする「農民画家」の美談について、兄にこぼしたことがあった。また、日勝は、画家として評価が高まるにつれて、農業のために制作時間が制限されることへの焦りと、制作のために農業に専念しきれないこと、画家と農民どっちつかずの状態について悩みを抱えるようになった。

神田日勝といえば、未完の馬の絵を想像する人が多いか



【『馬』(絶筆・未完) 1970年】

未完の作品が残された。日勝独特の一方から描き上げる描法で後脚の近くまで毛並みを丹念に描き、そこで中断された半身の黒い馬の絵である。横向きの穏やかな瞳のその馬には、やはり胴引きの跡があった。

もしれないが、牛や馬、労働者やアトリエなど身近なものをモチーフにしながら、しかしその画風は大きく変化している。自身の将来への不安を表すかのようにうつろな目つきの青年の絵は自画像と言われている。カラフルなポップ・アートのような作品もあれば、奔放に筆を走らせ、感情やエネルギーをぶつけたような作品もある。自身の表現を追求したい一方で、独立展への入賞のため、世間に受け入れられる絵をねらおうとする「焦り」もあったのかもしれない。

一九七〇(昭和四十五)年の春から体調不良が続き、八月に入り、新得町の病院に入院したが、病名不明のまま症状が悪化し、清水町の日赤診療所に移った。蓄積された疲労は容易に彼の体から抜けなかった。八月二十五日、神田日勝は帰らぬ人となった。死因は腎盂炎じんうえんによる敗血症だった。三十二歳の短い生涯しょうがいであった。

わずか十四年の画業であったが、彼の制作の根底には一貫して「いかに生きるべきか」の自問自答があった。様々な画風に挑戦したが、作品は常に牛馬や農民風の労働者、アトリエや絵の具など、自分自身が切実に「これなしでは生きられない」と思う必要不可欠な存在を選んで描いた。

「結局、どういう作品が生まれるかは、どういう生き方をするかにかかっている。どう生きるのか、の指針を描くことを通して模索もさくしたい。どう生きるかと、どう描くかの終わりのない思考のいたちごっこが私の生活の骨組なのだ」

日勝が亡くなる一ヶ月程前の言葉である。

* 拓北農兵隊：疎開と食糧生産を目的とした移住開拓隊

* ペインティングナイフ：油絵を制作するときに使う金属性のへら

* 胴引き：馬と農機具を連結するための馬具

* 厩肥：家畜の排泄物と敷きわらなどを混ぜて作る肥料

◎ 日勝にとって、「描くこと」はどのような意味をもっていたのでしょうか。

◎ なぜ日勝は、農民であり、画家であることに葛藤したのでしょうか。

◆ あなたにとって、「自分らしく生きる」とは、どのようなことでしょうか。

1	モチヤロクと じゅうたろう	音更町役場／音更町教育委員会 帯広百年記念館
2	林 豊 洲	十勝毎日新聞社
3	関 寛 斎	陸別町教育委員会
4	神 田 日 勝	鹿追町役場／鹿追町教育委員会

【編集委員】

吉村 公孝（十勝教育局教育支援課長）

山田 圭介（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主査）

児玉 祥洋（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主任指導主事）

奥田 裕幸（十勝教育局教育支援課義務教育指導班主任指導主事）

木挽 ひろみ（十勝教育局教育支援課義務教育指導班指導主事）

生田 裕章（十勝教育局教育支援課義務教育指導班指導主事）

佐藤 淳一（十勝教育局教育支援課義務教育指導班指導主事）

齋 慎之（十勝教育局教育支援課義務教育指導班指導主事）



道德教育地域教材
統一十勝野

令和3年3月発行

〒080-8588 帯広市東3条南3丁目
北海道教育庁十勝教育局教育支援課

TEL 0155-26-9241

FAX 0155-23-5320

URL : www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/tyk/index.htm